

研究主題

「言語活動の充実を通じた主体的に学習に取り組む児童の育成

—国語科『読むこと』における『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実させた指導の工夫—

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
葛飾区立東金町小学校 主幹教諭 堀口 麻衣

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領解説（平成29年告示）総則編では、予測困難な時代を生きる子供たちには、他者と協働して課題を解決したり、様々な情報を見極め、情報を再構築したりする姿が求められることが記されている。子供たちの生涯にわたって能動的に学び続ける力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う必要がある。

小学校学習指導要領解説（平成29年告示）国語編（以下「解説国語編」という。）では、国語科の資質・能力を身に付けるために、言語活動の充実と学習過程の明確化について述べられている。国語科「読むこと」においては、①「構造と内容の把握」②「精査・解釈」③「考えの形成」④「共有」の学習過程をより一層明確にし、問いを見いだしたり、問い直したりして自己の考えを広げ深めていくことが重要である。

言語活動を充実させ、自己の考えを広げ深めさせるためには、ICTの活用による「協働的な学び」の成果を「個別最適な学び」に還元するための手だてを講じる必要がある。

本研究では、対話が必然となる学習過程を通して、主体的に問いを見いだしたり、問い直したりして自己の考えを広げ深める児童の育成を目指す。

第2 研究仮説

言語活動を充実させるための学習過程を工夫し、ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業改善を行うことで、児童一人一人が主体的に学習に取り組む、対話が必然となる学習過程を通して自己の考えを広げ深めることができるであろう。

第3 研究の内容と方法

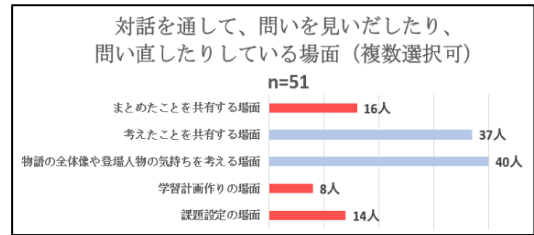
1 基礎研究

令和4年度「全国学力・学習状況調査」の小学校国語の報告書において、「読むこと」における正答率は、66.8%となっている。登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることや、人物像や物語の全体像を具体的に想像すること、表現の効果を考えることなどに課題が見られた。解説国語編では、「読むこと」を指導する際に、低・中・高学年ごとに学習過程における指導事項が設定されている。そこで示された学習過程は、「指導の順序性を示すものではない」と明記されている。指導を行う際には、学習過程のより一層の明確化と「考えの形成」を重視していくことが求められる。

2 調査研究

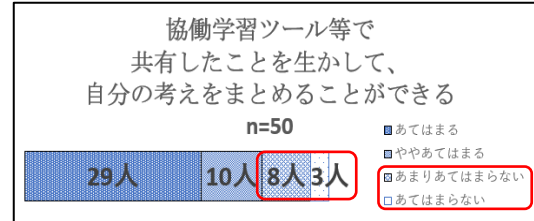
葛飾区内公立小学校の教員51人と所属校の第2学年147人、第3学年101人、第5学年50人を対象に、国語科の文学的文章を読む学習における学習状況や意識の実態調査を行い、課題の把握をした。

(1) 文学的文章を指導する際、「対話を通して、問いを見いだしたり、問い直したりしている場面はどの場面ですか」という質問に対して、学習過程ごとに差が見られた(図1)。



【図1 調査研究(1)の回答】

このことから、全ての学習過程において対話が必然となる授業改善が必要であることが分かった。
 (2) 第5学年の児童対象の「協働学習ツール等で共有したことを生かして、自分の考えをまとめることができますか」という質問に対して、50人中11人の児童が「できていない」と回答している(図2)。



【図2 調査研究(2)の回答】

このことから、他者との考えの違いに気付いたり、自身の考えを見直したりして、学びを深めるための手だてを講じる必要があることが分かった。

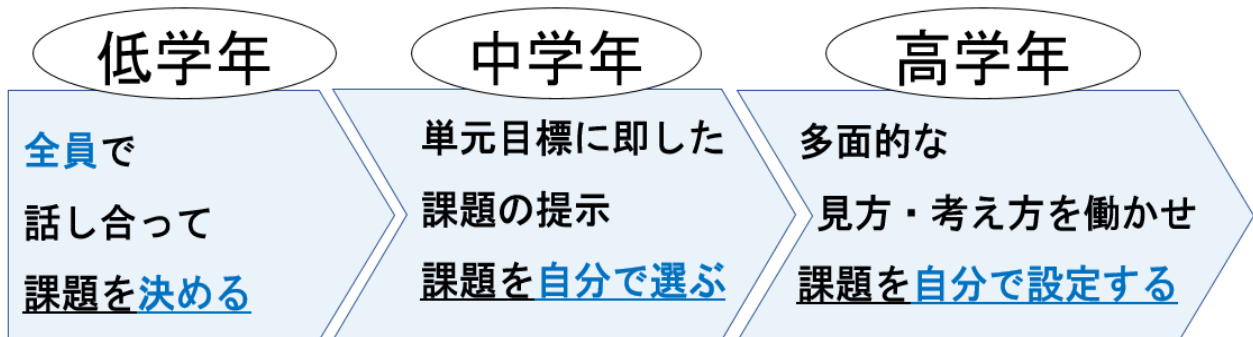
3 開発研究

調査研究の結果を踏まえ、研究主題に迫るための三つの手だてを考えた。

(1) 主体性を引き出すための発達段階に応じた課題の設定・提示(図3)

課題を自分で設定できるようにするために、低・中・高学年で系統的な指導をする。

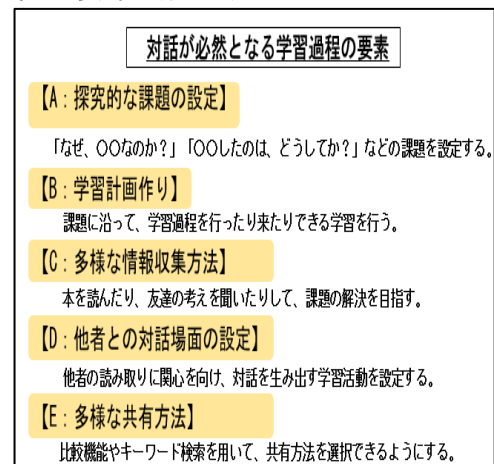
低学年は「全員で話し合っ課題を決めるための工夫」、中学年は「単元目標に即した課題の提示、課題を自分で選ぶための工夫」、高学年は「多面的な見方・考え方を働かせ、課題を自分で設定するための工夫」を行い、主体性を引き出す学習課題の設定・提示ができるようにする。



【図3 発達の段階に応じた課題の設定・提示】

(2) 言語活動を充実させるための対話が必然となる学習過程の要素(図4)

AからEまでの要素を授業に取り入れ、授業改善を図る。Aは「〇〇したのは、どうしてか?」などの課題を設定する「探究的な課題の設定」、Bは課題に沿って、学習過程を行ったり来たりできる学習を行う「学習計画作り」、Cは本を読んだり、友達の考えを聞いたたりして、課題の解決を目指す「多様な情報収集方法」、Dは他者の読み取りに関心を向け、対話を生み出す学習活動を設定する「他者との対話場面の設定」、Eは比較機能やキーワード検索を用いて、共有方法を選択できるようにする「多様な共有方法」である。

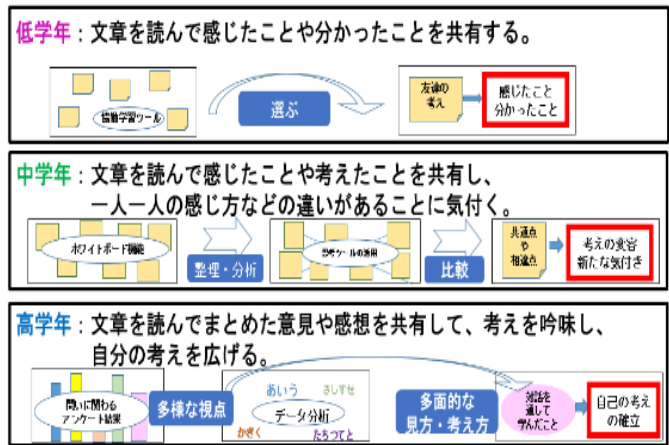


【図4 対話が必然となる学習過程の要素】

(3) 低学年・中学年・高学年の発達段階を考慮した「協働的な学び」を「個別最適な学び」に還元させ、自己の考えを広げ深めさせるためのICT活用の工夫（図5）

自分の考えをアウトプットし、共有しただけで終わるのではなく、共有したことを踏まえて、自分の考えをまとめられるようにする。

ICTアプリを活用し、低学年では、友達の考えを見て感じたことを書けるようにする。中学年では、感じ方などに違いがあることに気付くようにする。高学年では、考えを吟味し、自分の考えを広げ深められるようにする。



【図5 考えを広げ深めさせるためのICT活用の工夫】

4 検証授業の概要及び考察

(1) 検証授業の概要（表1）

検証授業は、都内公立小学校で行い、低学年（第2学年）、中学年（第3学年）高学年（第5学年）で各3時間、文学的文章を読む学習を行った。

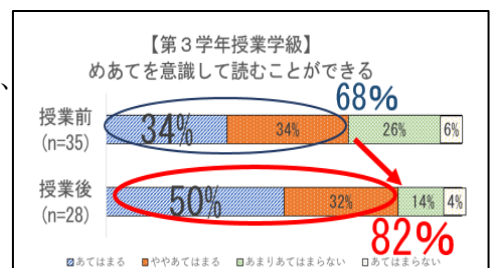
【表1 検証授業実施学年・単元名・教材について】

学年	単元名	教材
第2学年 (30人)	「読んだかんそうを書こう」	お手紙
第3学年 (35人)	「想ぞうしたことをつたえ合おう」	モチモチの木
第5学年 (27人)	「物語のおもしろさを解説しよう」	注文の多い料理店

(2) 発達の段階に応じた学習課題の適切な設定・提示について

第2学年では、全員で話し合っただけで決めた課題である「手紙を待つ間の、かえるくんとがまくんの気持ち」を考える課題を設定した。第3学年では、豆太の人物像について押さえた上で、「自分が紹介したい豆太の人物像」を考える課題を設定した。第5学年では、物語の全体像を捉え、物語をおもしろくしているポイントを多面的に押さえたうえで、「自分が読み取ったおもしろさのひみつ」を考える課題を設定した。

検証授業学級の中で、最も顕著な変容が見られたのは、第3学年で、単元目標に即した課題を自ら選ばせたことで、「めあてを意識して読むことができる」と回答した児童が授業前は68%だったのに対し授業後の調査では、82%になった（図6）。

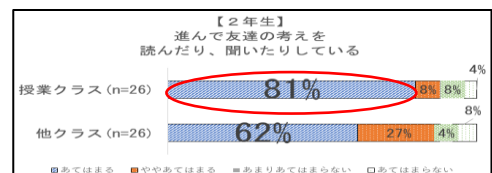


【図6 第3学年の学習課題についての事後調査】

(3) 対話が必然となる学習過程の要素について

第2学年を例に挙げると、「多様な共有方法」として登場人物の気持ちの変化をICTアプリの比較機能を使って見比べたり、「他者との対話場面の設定」として「もっと理由を聞いてみたい。」という対話の意欲をもたせたりして、学習過程の中で対話が必然となる場面を取入れた。

第2学年の授業後の調査で、「進んで友達の考えを読んだり、聞いたりしている」と回答した児童は、検証授業を実施していない学級が62%だったのに対して、検証授業を実施した学級では81%となった（図7）。

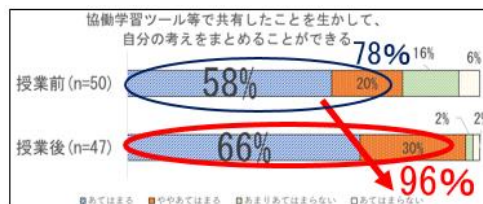


【図7 2年生の対話についての事後調査】

(4) ICTを活用した「協働的な学び」を「個別最適な学び」に還元させる手だてについて

考えを共有しただけで終わるのではなく、共有したことから分かったことや、自分の考えをまとめる際に、他者の考えを参考にできるようにした。第2学年では共有後に「似ている考えだな」などと思った友達の考えを選び、感じたことをまとめた。第3学年では共有した考えを思考ツールの「フィッシュボーン」で整理・分析した後に、友達の考えから学んだことをまとめた。第5学年ではアンケートやデータ分析を活用し、多様な視点から問いを見だし、友達の考えを参考にしながら、多面的な見方・考え方を働かせて、自分の考えをまとめた。

ICT活用の工夫を行ったことで、第5学年で顕著な成果が見られ、「協働学習ツール等で共有したことを生かして、自分の考えをまとめることができる」と回答した児童が、授業前が78%だったのに対して、授業後は96%となった(図8)。



【図8 第5学年の考えのまとめについての事後調査】

(5) 自己の考えを広げ、深める「深い学び」について(表2)

授業の振り返りでは、「同じ考えの友達を見つけた。」や「友達と同じ考えだと思ったけど、理由が違ったので、自分の考えをまとめる際に参考になった。」といった感想が出た。児童の考えを考察すると、特に第5学年の児童で、自己の考えを広げ深めている姿が多く見られた。

【表2 第5学年の検証授業での振り返りワークシートより】

児童A	<u>改めて 気付いたこと</u>	私は、最後の扉の奥で話をしていた山猫たちの会話が面白かったのですが、友達の意見の中には最後の扉の「さあさあ、おなかにお入りください」のところが面白いと言っていた。わたしも、それを面白いと思いました。
児童B	<u>違いに 気付いたこと</u>	友達は私と同じように「扉の注文のしかた」が面白いと書いていたのですが、私は「紳士が騙され続けていること」が面白いと思ったのに対して、友達は「読む人が扉の本当の意味を考えることができること」を面白いと言っていた。
児童C	<u>参考に したいこと</u>	「どうしてそう思ったのか」という理由を休み時間に聞いたり、「すごいな」と思ったことはやり方を見て参考にしたりしている。

第4 研究の成果

検証授業を通して証明できた研究の成果は、以下の二点である。

第一に、発達段階に応じて課題を設定したり、対話が必然となる学習過程を工夫したりするなどの言語活動の充実を図ることで、児童が主体的に学習に取り組めること。

第二に、ICTの活用を学習過程に位置付けることで、「協働的な学び」を「個別最適な学び」に還元することができること。

第5 今後の課題

ICTを効果的に活用した授業の実現に向けて、発達段階に応じた情報活用能力を確実に身に付けさせる必要がある。